

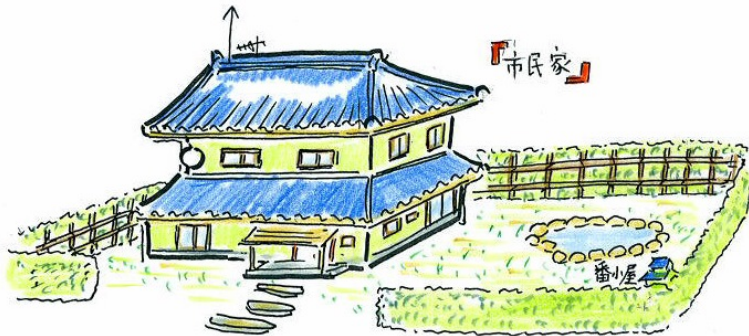
◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆

これまでのあらすじ

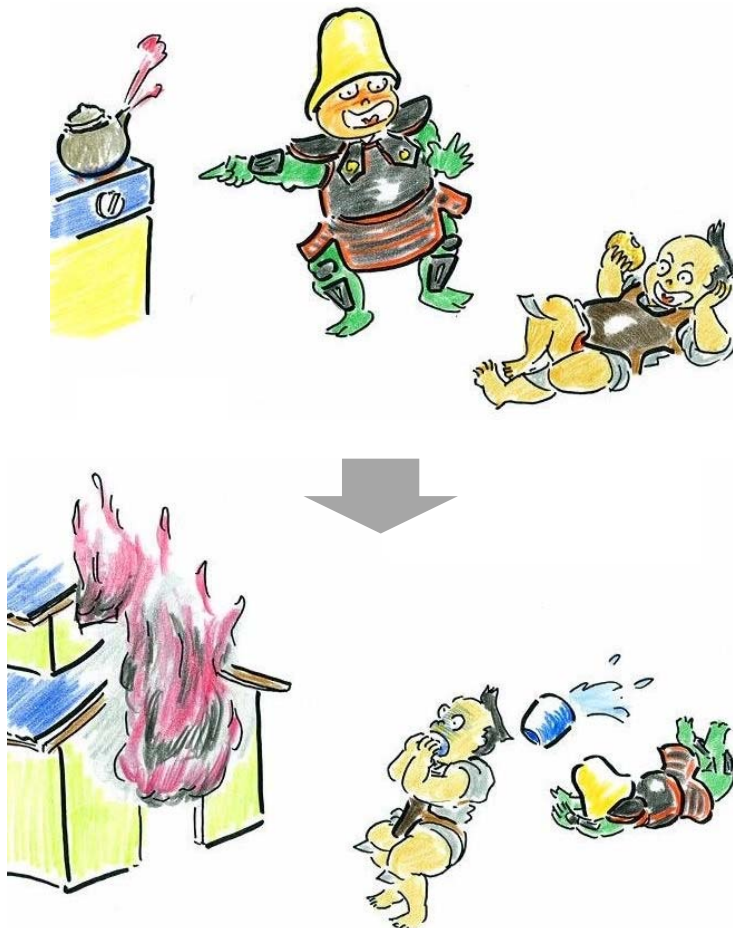
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.39

前号のあらすじ

龍が見たいと姫様に請われ、青大しょうの抜け殻に入ったご助は、姫様手作りの龍の頭を被せられ、アロンアルファで閉じ込められてしまいます。龍の格好のまま放置され、怒りに震えるご助は、姫様の「火を噴く龍が見たい」との望みを叶えるべく持ち込んだ混合油とライターで、ことここに至るまで助けてくれなかった主の支援に向け、炎を噴き出すのでした……

ご助龍の噴き出す炎を除けながら、

「や、止めんか危ない。そりゃあガソリンか？」と問いただす拙者に

「さようすじゃ。姫様の見たい龍は口から火を噴くと言われ、番小屋から草刈り機の混合油と禁煙したとき仕舞っておいたライターを持ってきたところを、こうやって閉じ込められたんでさ。」とご助龍は力なく言うのじゃった。



「ふっ、い、いや、大変じゃったな。」と笑いをこらえながら

「で、姫様は喜んだんじゃろ？」と拙者が話すと

「何言ってるんでさ。あのクソガキときたら、あっしが、さあ炎を噴き出して
見せませぬ」で油を口に含んだ時もとき、お屋敷から奥方様が 『えん、お雑
煮出来たわよ。』 と声を掛けられやすと 『はいママ』 って、あっしの
ことなど忘れたかのようにサッサと行っちまいやしたよ。」と 泣きながらご
助龍は言うのじゃった。



拙者の肩が大きく震えているのを見とがめたご助龍は

「だ、旦那様、お体を震わせて・・・な、泣いて下さってるんですかいっ？」

と感極まり、声を震わせ叫んだのじゃったが

「いーひひひい、な、なんちゅう馬鹿な話じゃ。正月早々初笑いじゃな！こりやあ良い初夢が見れそうじゃわい。いひひひっ」と拙者は笑い出してしまったのじゃった。



「お、おのれえ、クソガキといい旦那様といい、もお許せん！点火あ」と叫んだご助龍は、更に大きな炎を噴き出したのじゃった。

「おおっと、そうは桑名の焼き蛤よ。」と拙者が炎をかわすと

「待てっ、旦那様とて容赦できぬ、点火一」 ボオオー

「くしょおーっ 点火ー」 ボオオオー と炎を吐き続けたご助龍じゃ
ったが・・・

ところ構わず噴き出した炎がおのれの胴体に・・・青大しよう殿の抜け殻へ
と燃え広がったのじゃ。



「ああっ？」と叫ぶご助龍は、燃え上がり上空へと舞い上がる胴体と一緒に、
空高くへと吸い上げられたのじゃった。

「ひiiiiiiiiっ」と叫ぶ、ご助龍の口からペットボトルから流れ出た混合油が漏れ出し、ご助龍は体全体を炎に包むと、遙か上空で クネクネ クネクネ と身を振るのじゃった。そう、真の竜神様のように・・・

その時じゃった。お雑煮を食べ終え、お屋敷から出てきたクソガキが・・・
いや、姫様が

「龍ちゃ、龍ちゃ。ぼすけ！本物の龍ちゃぞ。龍が飛んでおる！ ぼすけ？どこに居るのちゃ？ぼすけーっ」と龍の正体を知らぬ姫様は、ご助龍を指さしながら ご助を探すのじゃった。



やがて上空で、胴体の殆どが燃え、上昇力を失ったご助龍、いや龍の頭に擬した兜を被ったご助が真っ逆さまにお屋敷のお庭へ、庭の池へと落ちて来たのじゃった。

「龍ちゃあ、龍がお庭に落ちてきたあ・・・見ちゃか、ちえん！ 援ちゃんのおうちに龍が落ちてきたじよ！」と姫様は大興奮！

「竜神ちゃまー」と池端へと駆け寄り、池の中を覗き込んだ姫様じゃったが、

恐ろしい顔をした竜神様が水中で口から赤い炎をチラチラと噴き出す様をご覧になり、怖くなったのか、拙者に向き直ると



「ちえん。龍は怖いからもう良い。ぼすけを見かけたらしょう言っておくの
ぢゃ。」と言うと、さっさとお屋敷へとお戻りになろうとする姫に向かい



「はっ。他に何か伝えおくことはござりませぬか？」と拙者がお聞きすると
「ぼすけのバキャ（馬鹿）に、禁イエン（煙）したのにライターをいつまで
も持っておりゆなと申しておきえ。」と言うと、静静とお屋敷へお帰りになら
れたのじゃった。

その入れ替わりに、背後の池で バシャン と大きな音して池の水底から、
気を失ったご助が浮き上がってきたのじゃった。



火傷で赤く腫れたご助の尻には、青大しょうの抜け殻がピタッと張り付き、その痛々しさに拙者の心は痛んだ。

これは可哀そうじゃ、早く救い上げなければと拙者が池から引き揚げようとするところへ、どこから現れたのかお屋敷の裏の小春殿が拙者の手を押さえ

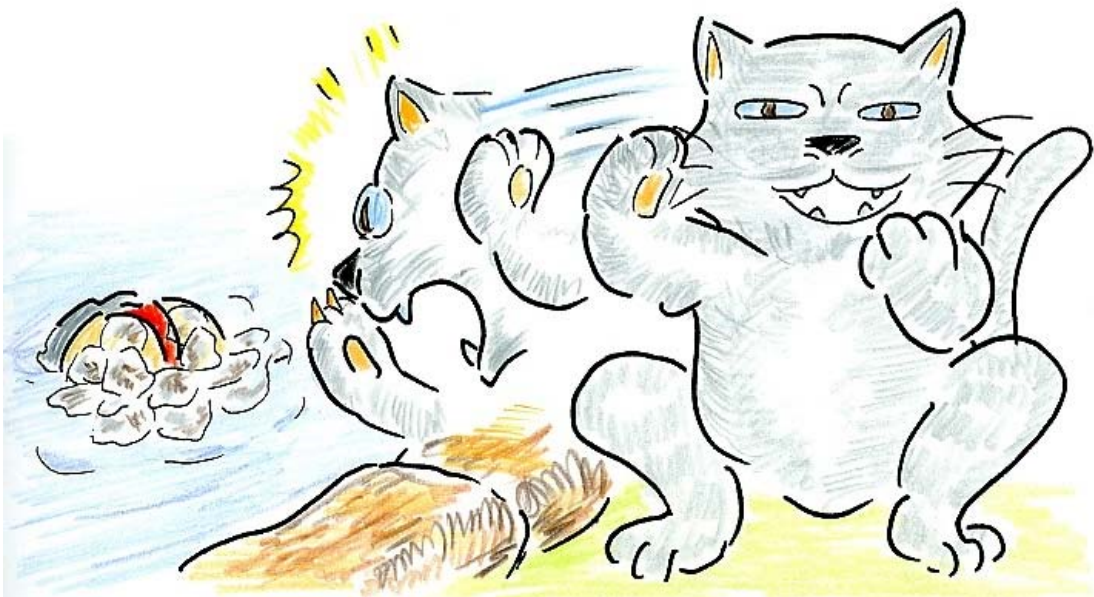
「駄目なんだニャー！」と言ったのじゃった。

「な、何をなされる小春殿？」と拙者が訝ると

「支援よ、マニュアルを見たのか？ちゃんと見たのか火傷の応急手当マニュアルを？」と小春殿に言われ、ハッと我に返ったのじゃった。

「そ、そうじゃ拙者としたことが・・・火傷をしたらまずは患部を冷水で冷やす。」

「そうにや。折角池の水で冷やされておるのに・・・」と小春殿。



「そ、そうですじゃ。それから衣服は脱がしてはいかん。」

「そうにや。無理やり脱がすと皮膚や水泡が破れて予後が良くにやい。」と小春殿。

という小春殿はご助の尻に張り付いたモノをじっとみると

「ま、まさかじゃ？いや、まさかと思うが・・・これはあたしの・・・」と

拙者を見るので

「ははは・・・」とだけ笑うと、コクリと頷いてみせたのじゃった。

そうしたら小春殿の目が急に吊り上がったかと思うと

「この馬鹿チンが！金運が上がると大事にしておった抜け殻を！」と叫ぶ

と

バシッ 爪を立てた強烈なネコパンチがご助の尻を・・・火傷で腫れた尻を襲ったのじゃった。

「うぎゃあああああああああああああ・・・」と早春の市民家の庭にご助の悲鳴が響き渡ったのじゃった。

さあて、皆様よ。今回の教訓は一体・・・何だったのでござろうかのお？」



(おしまい)